随喜功徳品について

On anumodāna puṇya- nirdeśa- parivartaḥ

望月海淑

1

随喜功徳品は分別功徳品が滅後の五品の一つとして説示した初随喜について、詳述したものだといわれている。(1) そして随喜功徳品は、梵文法華経の Anumodāna-puṇya-nirdeśa-parivartaḥ を訳したものであるから、如来の教説に随順して違わず聞いて心に喜びを生ずることの功徳に関する章(2)を意味するとせられている。すなわち随喜とは、仏の教えを聞いてこれに随順し、そこに喜びを生ずるということを意味することになる。

『法華文句』はこれを

随者随二順事理一無レ二無レ別。喜是慶レ己慶レ人。聞二深奥法一順レ理有二実功徳一。順レ事有二権功徳一。慶レ己有二智慧一。慶レ人有二慈悲一。権実智断合而説レ之。故言二随喜功徳品一。(3)

として、理・事・実・権・智慧・慈悲合したものであるとし、更にこれは、仏の本地の深遠なるを聞いて信順して逆らわないのが順理で、仏の三世の益物は一切処に遍するを聞いて一毫の疑もなく深理に即して広事に達し不二にして

而も二なることの信解を随というのだと説いている。

『法華玄論』は

随喜有二二種一。一通随喜若見若聞若覚若知三他所二作福一。皆随而歓喜謂三通随喜一。二者別随喜者。且拠レ聞三法華経一随而歓喜。故名三別随喜一。(4)

として、通・別の随喜をあげているが、『法華経疏』によれば、これが「随喜法」と「随喜人」ということになり、前者は法華経に順じて歓喜を生ずれば金剛般若で信心して逆らわなくなり、後者は法華経を受持し乃至解脱するを見て歓喜を生ずるからであるとしている。(5)

『法華玄讃』は、

随者順従之名。喜者忻悦之称。身心順従深生三忻悦一。以レ此為レ因生三功徳果一。此品広明故名三彼品一。随レ所二聞思修一皆生三随喜心一。論経従レ初但説レ聞故。(6)

と、身心の順従によって忻悦の果が生ずることを示しているが、更に、自ら随喜を生ずるのみならず亦、人にも教え勧めるものであることにも言及している。(7)

これら先師の所説によると、法華経を深奥の法とし、これは絶対なる法であるから、それに随うべきであるが、随うというのはやみくもではなく、事理や覚りや聞思修するところに随うというから、それは単に感情的なものではないことを意味しており、それ故にこそ法を聞き得たということに自ら大いなる喜悦が生ずべきものであることを示しているように思われる。すなわちこの法の存在、法の見聞と随喜とは不二なるものであろうから、法華経に対してのひたすらな心・信解こそが、随喜功徳においてあるべき心のあり方といえるであろう。

2

分別功徳品は後半において、如来の滅後におけるあり方に言及し初随喜を語っているが、それは、

如来滅後若聞二是経一。而不二毀呰一起二随喜心一。当レ知已為二深信解相一。(8)

と示されて、随喜の心がとりあげられている。この箇所の正・梵両法華経はそれぞれ、

如来滅度後族姓子女。聞二此経巻一亦不二誹謗一。歓楽受持。則為二如来一所レ見二擁護一。(9)

api tu khalu punar Ajita tān apy aham adhyāśayâdhimuktān kulaputrān vadāmi ye tathāgatasya parinirvṛtasyêmaṃ dharma-paryāyaṃ śrutvā na pratikṣepsyanty uttari câbhyanumodayiṣyanti(10)

（しかし実にアジタよ如来の完全な涅槃の後、この法門を聞いて捨てず随喜するであろう善男子を、私は一心に信解せるものと語る）

と示されている。すなわち、妙法華経が随喜の心を起すとなしたのは、abhyanumodayiṣyanti の訳であることになり、而して、深信解相と訳したものは、adhyāśayâdhimukta であり、正法華経はこれを誹謗せず歓楽受持すればとし、如来のために擁護せらるるところとなると訳出していることになる。この時、法門を聞いてと語られるから、随喜し一心に信解せる人々の対象は法門であり、法華経であるということになるが、法華経に対して心から把握し、自己の身心をまかせ切ってしまうことを、それは意味すると思われる。そして、そう捉らえる時に、正法華経の意訳の意味が生きて理解せられるであろう。

しかして、ここで注目したいことは、この随喜するであろうものは一心に信解せるものである、と随喜が信解と同

列にして語られているということである。

そこで更に、随喜功徳品における随喜に関する説示を見ると、

如来滅後。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。及余智者若長若幼。聞二是経一随喜已。……随レ力演説。是諸人等聞已随喜復行転教。余人聞已亦随喜転教。(11)

として、五十展転随喜の功徳を語っている。これに対する正法華経は、

如来滅度後其有レ聞二是所説経一者。若比丘比丘尼清信士清信女。男子女人大小眷属。聞已勧助。……為レ人解説。若為二父母宗室一歎詠。聞二大士言一亦読代レ喜。所可聞知展転相伝。不見法師威容色貌。若転学者代之勧助。(12)

とあり、梵文法華経は

tathāgatasya parinirvṛtasyêmaṃ dharma-paryāyaṃ deśyamānaṃ saṃprakāśyamānaṃ śṛṇuyād bhikṣur vā bhikṣuṇī vôpāsako vôpāsikā vā vijña-puruṣo vā kumārako vā kumārikā vā śrutvā câbhyanumodet | ……so 'pi yadi śrutvā 'numodeta anumodya ca punar anyasmā ācakṣīta | so 'pi yadi śrutvā 'numodeta anumodya……(13)

(如来の滅後にこの法門を説き語られているのを聞いて、比丘比丘尼、男の信者女の信者、少年少女は聞いて随喜するであろう。……彼は聞いて随喜し、随喜して他のものに語った。彼は聞いて随喜し……)

として、随喜(勧助)と訳されたものは、anu√mud であり、随喜はまたこの法門(法華経)を聞くということによっておこるべきものであることを示している。

そして五十番目の人に関して

不レ如レ…聞二法華経一偈一随喜功徳上。[14]

とあり、正・梵両法華経は、

其聞二是経一句一偈一勧助代喜。[15]

paraṃparā-śraveṇa puruṣa ito dharma-paryāyād antaśa eka-gāthām apy eka-padam apy anumodya ca puṇyam prasavati[16]

（法門から一偈一句を順次に聞いた人さえ随喜すれば功徳を生ずる）

と語って一句一偈なりとも随喜すれば、というあり方を明示しているが、ここでは随喜が信解と同列の説示は、ことさらには示されてはいない。

このような、法門から一句一偈を聞いて随喜すればという表現によく類似したものは、法師品の中に見出される。すなわち法師品の冒頭には、

聞二妙法華経一偈一句一。乃至一念随喜者。[17]

という言葉が見え、しかもこの言葉は再度くり返して語られているのを認めることが出来る。これに対する正法華経は、

聞二一頌一偈一。一発意頃歓喜歓助。[18]

とし、梵文法華経は

yair asyāṃ parṣady antaśa eka'pi gāthā śrutâika-padam api śrutaṃ yair vā punar antaśa eka-cittôt-

pādenâpy anumoditaṃ idaṃ sūtraṃ[19]

（この集りにおいて、この経典のただ一偈でも聞くか、ただ一句でも聞くか、或は一心を生じ随喜をしただけで）となされており、妙法蓮華経同様にやはり一心を生じという一句を除けば、随喜功徳品の説示に似た表現見ることが出来るであろう。

法師品はこのような説示につれて五種法師のあり方をのべ、如来滅後に法華経の一句偈を説示することを勧め、それをなす人は如来の使であり、如来を肩にする人であることを示しており、その点では分別功徳品の内容に似たものを表現しているということが出来るようである。

そこで分別功徳品の表現を見ていくと、一念信解を語り、更にこれについて偈で再説をするところに、

聞二我説一寿命一　乃至一念信　其福過二於彼一[20]

という言葉が見られる。これに対する正法華経は

其聞二仏寿限一　一時歓喜信　此徳為二最上一[21]

とのべ同様の意を伝えており、梵文法華経には、

āyuṃ ca mama yo śrutvā strī vâpi puruṣo 'pi vā | ekakṣaṇaṃ pi śraddhāti idaṃ puṇyam anantakam ||[22]

（女であれ男であれ、私の寿量を聞いて一瞬間でも信ずれば、その功徳は無限である）

であって、一念信、一時歓喜信と訳されたものは śraddhā であることを示しているから、法師品・随喜功徳品では随喜 anumodya となされるものが、ここでは信として表現されていることになるであろう。しかして、分別功徳品は右の文章に引き続いて、「深心須臾信」「信楽大法誼」「adhimucyen muhūrtaṃ」と表現して、ここでは信にあ

たるものが adhimukti であることをも示している。śraddhā と adhimukti との相違は微妙なところであるが、ともに仏・法・僧の三宝に対する心のあり方であることには変りがないといえる。しかし、この箇所での adhimukti の使用に際しては、疑惑 vicikitsā 動揺 iñjita 分別 manyana を捨てよ（妙・無有一切諸疑悔、正・奕捐猶予諸思想事）となされており、一個人の思慮・判断などを離れてありのままにものを見るという仏のものの見方に立つべきことを示しているから、その信解は対象に対して明確に決定する心作用[23]ということになるであろう。

しかして分別功徳品では前掲のように、随喜と信解とが同列にして語られてもいるので、ここでの随喜は信解というあり方を基盤においていると理解することが出来よう。中国の先師の事理や覚り等に随喜は随うとする見方もここに理由が存すると思われる。しかし、随喜功徳品の随喜が分別功徳品の見方をそのままにうけたものかどうかには疑問が存する。

3

布施浩岳博士によると、法師品の一念随喜は無条件授記であり、授学無学人記品以前における条件附授記とは趣きを異にしており、妙法華経に聞妙法華経一偈一句とあるのも、梵本には idam sūtraṃ とあるのみで経名は出ていない、等を挙げ、更に以前には見られなかった書写 ⟨likh が説かれ、廟 caitya の建立供養礼拝が力説されている等のことから、法師品は前の授学無学人記品等に接続するものではなくて、第二期成立にかかわるものであることをのべている。更に、博士は随喜功徳品についても、この品は法華経を高調しその前の分別功徳品が如来寿量品を高調するのとは調子を異にし、滅後の随喜をとりあげることは法師品・分別功徳品に似てはいても、分別功徳品が如来寿量品

の流通分であるに反し、随喜功徳品は純然たる法華経の流通分であるとし、更に塔観の発達における思想発達上の困難がある上に、分別功徳品・法師功徳品等は如来寿量品と一類の経であるから、随喜功徳品が是に連絡するためには品々の間に入るべき余地がないとし、さればとて分別功徳品と併記するのも困難であるとして、第一類の経に接続しうれば好都合としている。かくて博士は、随喜功徳品は第一類成立の法華経であり、法師品は分別功徳品とともに第二期成立の法華経であるとなしている。[24]

しかし、鈴木宗忠博士は原始分成立の法華経には古層と新層とがあるとし、分別功徳品は新層に属し、法師品は勧持・安楽行品とともに新古両層の中間にあり、随喜功徳品は法師功徳・不軽菩薩とともに新層の終りにあるとしている。そしてそれは、新層の結末は、一方では、法門の功徳であり、他方では、法門の付嘱であるとし、随喜功徳品は心の上から、法門の功徳を説いたものであるから、寿量法門の功徳を述べた分別功徳品に連続するのは、適当であるとなしている。[25]

すなわち、法師品が第二期（新層）の成立にかかわるものとしては、両博士の意見は一致するのであるが、随喜功徳品に関しては、全く相反していることを知りうる。この相異は鈴木博士が随喜功徳品を説示の内容だけからとりあげたのに対して、布施博士がそこに使用されている書写行の有無などの点検からなされた結果から生じたものと思われる。

そこでこれらの点を法華経実践のあり方を説いたとする五種法師について検討を加えてみよう。

五種法師に関する説示は、法師品・分別功徳品・法師功徳品・如来神力品等に見ることが出来るが、この法行は最初から五種類のものに決定されていたものではないらしい、[26]といわれる。これら諸品を妙法華経に見る限り、それは

受持・読・誦・解説・書写の型を備えているけれども、梵文法華経に見る場合、この五種法師はかなり複雑な様相をおびていることが解る。

そして、その複雑さの度合いは法師品において最もはなはだしくて、そこではとても五種法師として五種類に要訳することは不可能なさまであるといえよう。これに対して分別功徳品は読・誦にあたるものが√vacの一語ですまされている外は妙法華経と相通ずる型態をとっており、これは法師功徳品に至ると更に整理された型をとっている。[27] このことは五種法師が妙法華経で示されるような型に定型されるまでには、少々の年数がかかったであろうことを想起せしめ、この三品の順で型成せられたかと想起せしめる。

これらに対して随喜功徳品には、五種法師にかかわると思われる説示が長行の末と偈の末とに僅かにあらわれるのみである。ちなみにそれを列記すると、

何況一心聴レ説読誦。而於三大衆一為レ人分別如レ説修行。[27]

何況一心聴　解三説其義趣一　如レ説而修行　其福不レ可レ量[28]

となっているが、この中には布施博士の指摘する書写行は見えない。これに対する正・梵両法華経もそれぞれ、

何況有レ人専精聴受供養思惟。而復具足為レ人説者。[29]

kaḥ punar-vādo yaḥ sat-kṛtya śṛṇuyāt sat-kṛtya vācayet sat-kṛtya deśayet sat-kṛtya prakāśayed iti[30]

（まして恭しく聞き、恭しく読誦し、恭しく説き、恭しく説く人はいうまでもない）

とあり、書写行についてはふれておられないし、正・梵法華経の場合の偈の言葉は、妙法華経が説示したものに該当すると思われるものは見あたらない。

五種法師に関して、随喜功徳品が持っているあり方は、やはりかなり重大な事柄であるように思われる。法師品が五種法師を語り書写行をのべる時、そこでは、則為二如来一肩所二荷担一[31]とし、与二如来一共宿等[32]となされ、分別功徳品でも斯人則為レ頂二戴如来一[33]となされており、法華経即仏との立場に立っていることを示している。法華経即仏であるから、経典の書写行に意義が出て来るものと思われる。しかるに、その分別功徳品の後をうけた随喜功徳品にこれがなく、逆に法師功徳品に書写行があることは、随喜功徳品の説示は分別功徳品をうけたものではないとしなければならないであろう。

このように見る時、冒頭に掲げた、随喜功徳品は分別功徳品が説いた四信五品中の初随喜について詳述したものであると、する説は成立しないことになるであろう。

尚これについては、随喜功徳品も法師品や分別功徳品等と同じく、如来滅後[34]と語っておるから同一内容を意味するとなすことが出来るが、布施浩岳博士は、如来滅後の言葉は、授学無学人記品中にすでに、漸入涅槃とのべられており、梵文法華経はこれを dharmaṃ prakāśetva yadâpi nirvṛtaḥ saddharmu teṣāṃ samaṃ eva sthāsyati（滅後にても法を説き、正法は平等に存続するだろう）としているので、随喜功徳品はこれをうけたものであることを指摘している。[35]

4

すでに指摘したように、分別功徳品の初随喜は、法門に対し随喜の心を起さば、それは深信解の相であるとして、随喜の心が信解と同列にとり扱われており、更に一念信解によって示されるように、この信解は信 śraddhā と相通

じ、信の上に立つもので、疑惑や動揺や分別を捨てたところにおいてありうることを示している。

これに対して随喜功徳品の示す随喜は、この経を聞いて随喜するならば、という型で示されており、随喜がどのような心の状態、あり方に支えられているかについては説明が加えられていない。

そして法師品が示す随喜は、法華経を聞いて一心に随喜すればとして、随喜功徳品のあり方よりは更に一歩を進めているように思われる。

随喜なるものは一心なる心の上に立つものであることは当然のことであるから、それは信解ということにことさらに関連して説く必要はないであろう、という主張も生ずるところではある。しかし、もしそうだとするならば、何故法師品が一心に随喜すればとなしたものを、分別功徳品は更に詳説したのかとの疑問も生ずるところであろう。そこで更に、信と信解とが法華経において、どのようにとり扱われているかを検べる必要があろう。

5

法華経の信に関する記述において使用せられている言葉は、śraddhā adhimukti prasāda 等であるが、その大半は śraddhā adhimukti によって説示が展開せられて来ている。そしてこの両語について法華経には使いわけがあるように思われる。[36]

たとえば、方便品は舎利弗が仏にむかって法華経を説くことを懇請する場面、三止三請があり、それに引き続いて五千人の比丘等が退席するという五千起去がおこったことを示しているが、ここで語られているところをみると、そこから次のことが考えられる。

仏に対した舎利弗は唯願説レ之、唯願説レ之として、

聞二仏所説一則能敬信。[37]

と語るが、これに対する正法華経は

悉当二信楽。受持奉行一。[38]

として、妙法華経の敬信の語に対して、信楽受持奉行として、信がただ心の領域のみにとどまるものではなくて、仏の説示を受持し奉行するという行いにまでつながることを示しているが、梵文法華経はこれを、

yāni bhagavato bhāṣitaṃ śraddhāsyanti pratiyiṣyanty udgrahiṣyanti[39]

（世尊が説いたものを信じ、到達し、会得するでありましょう）

と示しているから、仏の説示をただ信ずるだけにとどまらないで、到達 prat√i 会得 ud√grah にまで及ぶことを示している。更にこの箇所を重説する形をとる偈の中では、それぞれ、

妙……是会無量衆　有二能敬信者一[40]

正……恭粛安住　欽信悲誼　斯之等類　必皆欣楽[41]

梵……śraddhāḥ prasannāḥ sugate sagauravā jñāsyanti ye dharmam udāhṛtaṃ te[42]

（彼等は善逝を恭しく信じ浄信し、法の説示を理解するであろう）

とされて、śraddhā と prasanna (prasāda) とが並記されて、妙法華経において単に敬信とせられたものが、そこにとどまるだけではなくて仏の法についての説示の理解にまで及ぶべきものであることが示されている。

そして、一仏乗を開顕せられた後、仏は舎利弗にむかって、

若有二比丘実得二阿羅漢一。若不レ信二此法一。無レ有二是処一。[43]

と語るが、ここに該当する正・梵両法華経はそれぞれ、

諸比丘為二羅漢一者。無レ所二志求一諸漏已尽。聞二斯経典一而不二信楽一。[44]

asthānam etac chāriputrânavakāśo yad bhikṣur arhan kṣīṇāsravaḥ saṃmukhībhūte tathāgata imam dharmaṃ śrutvā na śraddadhyāt[45]

（舎利弗よ、煩悩を尽した阿羅漢の比丘らが、如来の面前で、この法を聞いて信じないということは不要であり、あり得ない）

となされている。すなわち、一仏乗を説示する法華経なればこそ、そこに住む人は信ずるという心のあり方以外に道はあり得ないということを強調していると思われる。

しかして法華経は、このことは現前に仏がある時に限ると限定しているが、その理由は、仏滅後の世の中においては、法華経を受持・読誦し、その義を解るものは得難いからだとしている。[46] ここでは、仏滅後に信じることがあり得ない理由が、受持者、読誦者等にならないという時、これは「信」ということが同時に受持・読誦あるいは教示につながるべきことを暗示しているであろう。してみると信 śraddhā というものは、仏道へ入るための目的ではなくて出発点であり、目的地までこの信が保たれ、それが受持・読誦・教示等の実際の行いにおいて生かされていかなければならないことを示していると思われる。

同じ方便品は五千起去に際して、仏が五千人の人々が退席したことについて語った言葉を示しているが、それは

我今此衆無二復枝葉一。純有二真実一。舎利弗。如レ是増上慢人。退亦佳矣。[47]

となされている。これに対する正法華経には、

衆会辟易有二竊去一者。離広大誼声味所拘。又舎利弗。斯甚慢者退亦佳矣。[48]

とあり、梵文法華経には

niṣpalāvā me Śāriputra parṣad apagata-phalguḥ śraddhā-sāre pratiṣṭhitā | sādhu Śāriputrâiteṣām ābhimānikānām ato 'pakramaṇam |[49]

（舎利弗よ、私の衆会から不用な者、無益な者は去っていった。すべて信において定住している。舎利弗よ、これら増上慢の者が出ていったのはよいことだ）

とされている。すなわち妙法華経が純有貞実と表現したものは、信において心が定まっているということであろう。そしてここで純貞実となされた人々は、五千人の増上慢の人々が立ち去った後も、法華経を聞こうとして残っていた人々のことであるから、それは退亦佳とされた増上慢の人々の心とは反対なものであり、その増上慢の人々は法華経を聞いても敬信しないとされている、この仏が求める信に対する反対のあり方が増上慢にあることは明白であろう。[50]

このような信 śraddhā に関する説示は如来寿量品においても見ることが出来る。すなわち、その冒頭には仏が弥勒菩薩等にむかって信を呼びかける言葉がある。それは

諸善男子。汝等当レ信二解如来誠諦之語一。[51]

であるが、これに対する正法華経は、

諸族姓子。悉当レ信二仏誠諦至教一。勿レ得二猶予一。[52]

であり、その信は猶予すべからざるものであることを示している。梵文法華経は、

avakalpayadhvaṃ me kulaputrā abhiśraddadhadhvaṃ tathāgatasya bhūtāṃ vācaṃ vyāharataḥ[55]

（善男子よ、如来の真実の言葉を信ずべし）

となされている。正法華経のみが勿得猶予の語をつけ加えたのは、信というものは、あれこれと迷うべきものではなく決定しているべき心のあり方であるところから、かく補足したものなのであろうか。妙法華経の信解の訳語は一見adhimukti と理解されそうであるが、梵文法華経は明白に śraddhā としているのでこれはやはり信であろう。

この言葉は三度くり返され、三度とも弥勒菩薩等によって、

我等当レ信受二仏語一……妙[54]

我等悉信二如来所詔一……正[53]

vayaṃ tathāgatasya bhāṣitam abhiśraddhāsyāmaḥ[56]

（我々は如来の語られたものを信ずるでありましょう）

との返事がなされている。仏が求めたものは仏の教えをただ信ずるというあり方であることは明白であろう。

このように、法華経の二本の柱といわれる方便品と如来寿量品における説示の展開において見られるものは、信 śraddhā の強調であり、その信において心が決定されると判断をされた時に重要な一仏乗と久遠実成の説示が繰り広げられている時、信は法華経に入るための第一の心のあり方であり、ここからすべてのものが展開されうる契機となるものだと判断をすることが出来るのではなかろうか。しかして、その信は増上慢と相反するものであるとされるから、それは一人よがりや、ふたしかなものに頼ろうとし、正論をこえて不可思議なものを信ずるということではなくて、仏の語に直参することによって、ありのままにこの世を見るという仏教の根本精神につながるものでなければ

ならない。その意味では以信代慧とよばれる言葉によってとらえられる信は、慧を不用のものとする考えとは逆で、慧 prajñā によって仏の境界に到達出来ると考えた『般若経』の説示に関連して、慧が体得しようとしたものを信によって体得しようとするあり方であり、文字通り信が慧にかわるもので、信と慧の優劣を競うものではないといえよう。ただしこのあり方は、仏の教えに対する人々の機根の問題（実践論）は考慮にいれないで、純粋に教えに相対する場合の見方ではある。

信解 adhimukti の使用例を方便品の中に求めると、十如是を説かれた仏は偈をのべられるが、その中に次の言葉がある。

諸余衆生類　無レ有二能得レ解　除二諸菩薩衆　信力堅固者一[57]

これに対する正法華経は、

察二諸群黎類一　世間無下与等　若説二経法一時　有中能分別解上　其惟有三菩薩　常履二懐信楽一[58]

と示し、梵文法華経は

yasya taṃ deśayed dharmaṃ deśitaṃ câpi jāniyāt | anyatra bodhisattvebho adhimuktiya ye systhitāḥ[59] ||

（かのダルマを教示されるべき人、教示されたダルマを理解しうる人は、信解に住している菩薩たち以外にはない）

となされていて、信力堅固、履懐信楽と訳されたものは信解 adhimukti であることを示している。更に同じ偈の中

で、

舎利弗当レ知　諸仏語無レ異　於二仏所説法一　当レ生二大信力一[60]

とのべられるところでは、

告二舎利弗一　安二住所説一　唯仏具足　解達知レ彼　最勝導利　悉暢二了識一[61]

yaṃ Śāriputro sugataḥ prabhāṣate adhimukti-saṃpanna bhavāhi tatra[62]

（舎利弗よ、善逝が語ったものに信解を具足せよ）

とのべられ、ここでも信解 adhimukti がとりあげられたことを示している。

前者においては、仏によって説かれる法を理解出来るのは信解に住する菩薩だけだとしているが、ここでは法（法華経・一仏乗）を理解しうる人は、すでに信解をもっているということになり、仏の言葉を信ぜよというあり方とは異っていることを指摘しなければならないであろう。そして後者においては、信ぜよというのと同様のあり方ともとらえうるが、果してどうなのだろう。

方便品は一仏乗を仏が説示した後、過去・未来の諸仏もこのように法を説いたとしているが、そこでは、

以二無量無数方便種々因縁譬喩言辞一。而為二衆生一演二説諸法一。[63]

と示されている。これに対する正法華経も

以二権方便若干種数。各各異音開化一切一。而為二説法一皆興二大乗一。[64]

と示され同様の意を伝えているが、梵文法華経は、

ye nānâbhinirhāra-nirdeśa-vividhahetu-kāraṇa-nidarśanârambaṇa-niruktty-upāya-kauśalyair

nānâdhimuktānāṃ sattvānāṃ nānadhātv-āśayānāṃ āśayaṃ viditvā dharmaṃ deśitavantaḥ[65]

（彼等はこの世の衆生たちの種々な信解と種々な考え方を知って、種々に敷衍し説示し、種々な因縁と理由と想念と語源的説明とを善巧方便によって法を説示した）

として、種々因縁譬喩言辞と訳されたのは、衆生たちの心の中の信解 adhimukti 考え方āśaya に理由があることを示している。これは一仏乗を説示するに至るまでの仏の種々の説示に関して語ったものであるから、ここで考え方 āśaya とともに示された信解 adhimukti は一仏乗以前の教えを聞いた衆生が体得しえていた心のあり方を意味するから、それは教えにより到達し得た一つの心の境地を意味するであろう。

方便品の一〇九偈では

我以三智慧力一　知三衆生性欲一[66]

とあり、これを梵文法華経は

deśemi dharmaṃ ca bahū-prakāraṃ adhimuktim adhyāśaya jñātva prāṇinām[67]

（生きているものたちの信解と考え方を知って、沢山な種類のダルマを私は説く）

となして、衆生の性欲とは信解 adhimukti と考え方 āśaya であることを示している。このように adhimukti が āśaya とともに用いられる形はこの外にも方便品においてみることが出来るが[68]、このことは adhimukti が「信ずる」というあり方よりもむしろ、仏の教えによって到達し得た心の状態を表現する意の方が強いのではないかと思わせる。種々な信解 nānâdhimukti という言葉が度々語られるのも、hīvâdhimukti という言葉が示されるのも、そのような状態であるから可能なのではないのだろうか。信解品の中には数多くの adhimukti に関する説示を見ること

が出来るが、その大半は妙正法華経によって「楽」「志意」と訳されているのもそこに理由が存すると思われる。[69]

そして、如来寿量品における唯一の adhimukti の使用例もまた妙法華経は楽小法とし、正法華経は不信楽とし、梵文法華経は nānâdhimukti としている。[70] したがって信解で法華経が説示するものは、それだけでは必ずしも絶対な境地ではないということであり、それ故にこそ信 śraddhā とともなる絶対な信解を求めなければならないということであろう。

6

このような信と信解のあり方を見た上で分別功徳品の一念信解を見る時、そこで śraddhā と adhimukti とが並記して語られる理由を知ることが出来るが、このような信・信解をふまえた上での随喜というものが、本来求められる随喜のあり方ということになるであろう。分別功徳品が随喜と並列して信解を語り、更に信にも言及しているのもそのためであろう。

しかし随喜功徳品は prasāda 浄信について語ることはあっても、[71] 信と信解には全く言及しておらない。もっとも法師功徳品、常不軽菩薩品、如来神力品等も信と信解には言及していないで、常不軽菩薩品のみが prasāda に一度だけ言及しているのみであるが、[72] それにしても、随喜功徳品が分別功徳品をうけついだものとするならば、やはり信・信解に関説しないのは不自然に思われる。信・信解のない随喜は慢心につながりやすいからである。こう考えてみると、授学無学人記品もまた信・信解に言及していないので、随喜功徳品はそちらの方をうけついだものと思われるところである。そして随喜が慢心につながる恐れあるをもって、法師品は一心にという言葉をつけ加えたのではなか

ろうか。

〔註〕

(1) 坂本幸男『法華経下』（岩波文庫）の解説、440等。

(2) 右書351、右書の岩本裕訳では、「心から帰依することの福徳についての解説」松濤誠廉等訳「法華経Ⅱ」では、「随喜の福徳」

(3) 大正三十四・138中

(4) 同　・445上

(5) 同　・613上

(6) 同　・836中

(7) 同　には「此品不二但自生一随喜一。亦教勧レ人」とある。尚、『法華義疏』613上、には能随喜と所随喜とがあるとせられている。

(8) 大正九・45中

(9) 同　・117上

(10) KN本・338

(11) 大正九・46中下

(12) 同　・118上

(13) KN本・345～6

(14) 大正九・46下、尚このような説示は、この外にも47上等にある。

(15) 同　・118中

(16) KN本・349

(17) 大正九・30下

(18) 同　・100中

(19) KN本・224

(20) 大正九・45上

(21) 同　・116下
(22) KN本・336
(23) 藤田宏達「原始仏教における信の形態」（『北海道大学文学部紀要』第六号）94
(24) 布施浩岳『法華経成立史』39以降
(25) 鈴木宗忠『法華仏教』66～79
(26) 布施浩岳『法華経成立史』4以降
(27) 大正九・47上
(28) 同　・47中～下
(29) 同　・118中～下
(30) KN本・350
(31) 大正九・31上、100下、KN本・227
(32) 同　・31中、101中、KN本・231
(33) 同　・45中、117上、KN本・338
(34) 同　・46中、118上、KN本・345
(35) 布施浩岳『法華経成立史』110
(36) 拙稿「信に関する一考察」（『棲神』四十七、四十八、四十九、五十号収集）
(37) 大正九・6下
(38) 同　・69下
(39) KN本・36
(40) 大正九・6下
(41) 同　・69上
(42) KN本・36
(43) 大正九・7下
(44) 同　・69下

(45) KN本・43
(46) 大正九・7下「仏滅度後。如ㇾ是等経。受持読誦解義者。是人難ㇾ得」。70上「大聖滅度不以斯行。令受持説方等頌経。」KN本・43～44「na hi te Śāriputra śrāvakās tasmin kāle tasmin samaye parinirvṛte tathāgata eteṣām evaṃ rūpāṇāṃ sūtrāntānāṃ dhārakā vā deśakā vā bhaviṣyanti」
(47) 大正九・7上
(48) 同　・69中
(49) KN本・39
(50) 大正九・6下「諸増上慢者　聞必不敬信」大正九・69中「仮使吾説　易得之誼　愚癡闇塞　至懐慢恣」K本・37「abhimāna prāpta bahū santi bālā nirdiṣṭa dharmasmi kṣipe ajānakāḥ」
(51) 大正九・42中
(52) 同　・113上
(53) KN本・315
(54) 大正九・42中
(55) 同　・113上
(56) KN本・315
(57) 大正九・6上
(58) 同　・68上
(59) KN本・31
(60) 大正九・6上
(61) 同　・68中下
(62) KN本・32
(63) 大正九・7中
(64) 同　・69下
(65) KN本・41・42

(66) 大正九・9中
(67) KN本・54、尚、正法華経は意訳で「為二人中王一　興二発聚庶一　安穏利誼　種々音声　億百千姟」となしている。72上
(68) KN本・41、45、49、53、54等
(69) 拙稿「adhimukti と śraddhā」（『棲神四八号』参）
(70) 大正九・42下、113下、KN本・318
(71) 大正九・47上中、118下、119上、KN本・351、352
(72) 大正九、50下、123上、KN本・378